

7

岩手県里親会の取組み

東日本大震災で、親が犠牲になった孤児・遺児は、岩手県で94名で、すべて祖父母やおじおばなどの親族のもとで養育されています。

しかし、親族里親自身も身内を亡くした悲しみが癒えぬ中、突然、それまで孫や甥姪として接していた孤児・遺児を養育することとなった親族里親の養育者としての戸惑いは計り知れず、また身内ゆえに悩みも吐き出しにくいであろうことが予想されました。

岩手県里親会は、その様な被災孤児を養育する里親等に対し、児童の養育や心理面のケア等についての支援を行うことで、被災孤児の生活と情緒の安定を図ることを目的に「親族里親等支援事業」を岩手県から事業受託し、平成23年度から継続して活動を行ってきました。

(1) 震災直後の岩手県里親会のうごき

東日本大震災発災後、岩手県里親会は、震災により被災孤児・遺児が多く出現することを想定し、その様な子どもたちに頼れる親族がない場合に、家庭的な環境での養育が失われることがないよう、県内の里親会員に受け入れを要請した結果、35組の里親会員から、50名以上の児童の受け入れ可能という調査結果を受けて岩手県に受け入れ用意があることの申し入れを行いました。

岩手県内の被災孤児・遺児は、とても強い地縁・血縁に助けられ、全員が親族のもとで養育されることとなり、里親会としても一安心するとともに、親族里親等に対しての支援に取り組むこととしました。

(2) 全国里親会からの支援

全国里親会も、各都道府県・政令指定都市の里親会に被災孤児・遺児の受け入れを呼びかけ、発災直後の平成23年3月には調査団が来県、「全国の里親会もぜひ利用してほしい」と関係機関や各市町村に申し入れを行いました。

また、全国里親会では「全国里親会大震災こども救援基金」を開設、被災した里親に対して支援金を支給するとともに、被災状況によって見舞金も支給されました。

この申請には、岩手県里親会でも積極的に利用するよう呼びかけ、県内の各児童相談所にも協力の働きかけを行いました。

(3) 親族里親等支援事業について

岩手県から委託を受けた「親族里親等支援事業」は平成23年6月に受託が決定し、同年9月より本格的な活動を開始しました。

[写真は里親サロンの様子]



① 平成23年度の取組み

「里親家庭訪問」「里親に求められるもの」「被災した児童の心のケア」などをテーマとして、NPO法人里親子支援のアン基金プロジェクト、全国里親会、岩手県臨床心理士会に協力頂き、県内5カ所で交流研修会を行いました。

研修会のあとは意見交換会も実施しましたが、参加者の里親が集団ではなかなか悩みを話せないことに気づき、個別に気軽に話せる場が必要として、その後県内3カ所で『里親サロン』を実施。正副会長をはじめとした内陸の里親会員が沿岸部へ出向き、親族里親等のお話をお聞きしました。

② 平成24年度の取組み

平成24年度も引き続き岩手県より「親族里親等支援事業」を受託した岩手県里親会では、「悩みや話したいことを吐き出せる場が常にあることが、親族里親等の心



の拠り所になってくれれば」と考え、『里親サロン』の開催に重点を置き、24年6月から県内3カ所（宮古市・釜石市・陸前高田市）で毎月1回ずつ開催してきました。

H23年度の反省を活かして、内陸から支援に入る里親会員の担当地区を決めて少人数で訪問することとし、参加者と継続的な関わりを持てるように配慮したほか、必要に応じて臨床心理士や弁護士、各児童相談所にも出席頂き、問題の共有・解決につなげる橋渡し役を担いました。

また、1月は里親サロンと並行し「教育にかかるお金について」をテーマに研修を実施。ファイナンシャルプランナー資格を有する岩手県社協 菅原進専門員が講師を務めました。

③ 里親サロンの実施

サロン参加者からは、「同じ境遇の里親さんの話を聞くだけでほっとする」「安心して話ができる」といった声が



聞かれています。悩みや不安だけでなく、世間話に花が咲くことも多々あり、サロンを通じて参加者同士のつながりづくりの手伝いことができました。実際に、参加者同士が個人的に連絡先を交換し、サロン以外でも電話で近況報告をしあう例もあります。

24年度は上記の他、日本子ども支援協会と全国日蓮宗青年会の協力を得て、レスパイト(リフレッシュを図る家族支援サービス)旅行会「集まれ東北のこどもたちin横浜」(平成24年12月26日～28日)を実施しました。

これは、東日本大震災以降子どもの養育に奮闘している里親さんたちが、子育てから少しだけ離れて休息を得られるようにと、被災孤児・遺児を対象とした旅行会で、岩手県里親会も協賛団体として周知協力するとともに、高橋忠美会長が岩手県里親会を代表し旅行会に同行しました。

2泊3日ではありましたが、里親たちは育児を一休みすることができ、また参加した子どもたちも東京スカイツリーやカップヌードルミュージアムなどを訪れ、被災地から少し離れて非日常を満喫してきた様子です。

(4) 親族里親等の状況と今後に向けて

「親族里親等支援事業」開始直後は、子どもの養育にかかる経済的な不安の声やそれまで孫や甥姪であった子どもと一緒に住むことによる戸惑い、また子育てから長期間離れていたことによる養育の不安も多く聞かれましたが、時間の経過とともに、「義援金等により莫大なお金を持つこととなった子どもへの金銭管理の指導をどうするか」、「親を亡くしてかわいそうと思う気持ちが先行し、叱ることができない」という声も聞かれるようになりました。

また、「震災から2年の節目を前に、子どもが亡くなった親への気持ちを少しずつ話すようになった」との話も県内各地で共通して聞かれる話題です。

併せて、祖父母の里親が高齢となり、養育者がおじおばへ変更される状況も報告されており、今後も様々な状況に応じた継続的な支援が必要と考えています。

岩手県里親会では、本当にたくさんの方々・団体から支援を受けて事業を実施してきました。今後も、親族里親等のニーズに柔軟に対応しながら、引き続き支援を行っていく予定です。

岩手県里親会
副会長 藤原 ヨシエ



東日本大震災から2年、長いような短いような、あっという間の月日でした。

震災により親、兄弟、家族を失った方々がどんなに大変な思いで毎日を暮らしてきたかと思うと、心が痛みます。

岩手県里親会では、震災によって里親になった方々が悩みや不安を吐き出せるように「里親サロン」を開催してきました。23年度は内陸の会員複数名が沿岸各地へ出向いていましたが、支援する側の人数が多く参加者がなかなか悩みを話してくれないことに気づき、24年度は地区担当を決め、少人数で出向くことにしました。

私は宮古地区のリーダーとして毎月出席しました。会場には必ず3～4名は参加してくれましたが、最初は顔色も暗く、大きな声で話せずに口を手で塞ぎながら低い声で話す人もいました。何回か顔を合わせるうちに、悩みを大きな声で話してくれるようになりましたが、「これではいつまで経っても心が和むはずがない」と思い、私は宮古地区の里親さんたちに電話をかけることにしました。

それが大成功でした。家にいる時に話を聞くと、「家族の絆」がいつのまにかしがらみになってストレスを抱えていたり、一人ぼっちで仮設住宅に入っていて夜になると寂しくなって塞ぎこんでしまったり…いろいろでした。

電話でも何回も話をしていくうちに、心がほぐれて泣いたり笑ったり、そして今では「次のサロンには顔を見に行くから」「サロンが待ち遠しい」と言ってもらえることもあり、ほっとしています。

サロンで聞かれる話の内容によっては臨床心理士や弁護士の先生のアドバイスもいただくこともありましたし、児童相談所にも力を借りなきゃと思う時は、前もって連絡を入れて所長さんに出向いてもらうこともありました。本当にたくさんの方の協力をいただきながら、24年度も活動を終えようとしています。

どの人も皆大変です。でも少しずつ気持ちが変わってきて、「生きていこう」「頑張らなきゃ」と思ってもらっただけでも続けてきてよかったと感じています。そして私自身も、参加者から勇気と力をもらいました。

家族の中心となって頑張っている人が一番大変でしょうが、どうか負けないでください。自分が負けそうになった時は大きな声で助けを求め、皆で助け合い命を大切に生きて行ってほしいと思います。

「努力してこそ感激あり」命を大切に